

山陰の「小さな文化」を楽しむ

ひだまりのおと

第2号 2020

特集：「かける」





山王寺和野社中 in 松江城

本誌『ひだまりのおと』は、島根県立大学短期大学部総合文化学科の授業「文化情報誌制作」の成果物です。
特集ワードからそれぞれの発想で取材先を決め、写真撮影、誌面レイアウトまで、学生が行っています。

目次

巻頭（寄稿） 大多和 弥生（松江歴史館 学芸員） 「漆と八雲塗」 1

特集 「かける」

人と食との「架け橋」～ Sunday Market CiBO ～（出雲市） 2

雲南に「かける」橋（雲南市） 10

耳でつながる神のまち（出雲市） 16

次世代に架ける 出雲神楽 山王寺和野社中 in 松江城（松江市・雲南市） 22

寄ってみました伊野（出雲市） 26

高原神社例祭 みえてくる町へかけるおもい（邑智郡邑南町） 32

組合で繋ぐ人々の輪 神門通り（出雲市） 38

特別掲載 島根県立大学短期大学部保育学科 キッズシアター 44

編集後記（裏表紙裏）

表紙題字 篠村優花（総合文化学科卒業生）

漆と八雲塗

大多和 弥生 (松江歴史館 学芸員)

近年、漆器の存在が生活の中で希薄になっていきますが、漆は古くから人間の生活に深く関わっており、縄文時代人々は、既に漆を身の回りの品に塗布していました。

松江にも古くから漆づくりの文化が培われてきました。島根県における漆の最古の使用例は、松江市手角町・長海町及び美保関下宇部尾の夫手遺跡から出土した縄文時代の漆容器です。

江戸時代後期には、藩主の審美眼に支えられたお好みの茶道具を制作し、洗練された松江の漆文化が作られました。松平家松江藩主七代・治郷（不昧）は京都で学んだ蒔絵師、九代斎斎（齊貴）は江戸で学んだ蒔絵師を抱え、自身のお好みの道具を制作させました。

漆はウルシノキの樹液です。ウルシノキから採取した漆の色は、コーヒート牛乳のような色をしています。この漆を生漆といいますが、この生漆を精製し、水分を飛ばした漆を透漆といひ、黒や赤の顔料を入れると、黒色の漆、赤色の漆ができあがります。現在は多種多様な色の顔料が開発され、カラフルな漆が作れます。このカラフルな顔料こそが、松江の伝統工芸である八雲塗に多大な影響を与えました。

八雲塗は、鮮やかな色漆で草花図などを描いた上に透き漆を塗り、研ぎの後、磨きを繰り返して仕上げた漆器です。多くの漆器が蒔絵や漆絵の図柄を全て研ぎ出してから磨き上げるのに対し、八雲塗りは図柄がうっすらと見える程度まで漆を残すよう研いでから磨き上げます。艶色の漆は、使い込むことで透明度と艶が増し、図がはつきり見えるようになります。大変手の込んだ仕事です。

八雲塗の始まりは、明治20年頃、松江藩の駕籠塗り職人であった坂田平一が作った漆器が始まりだったと伝わっています。坂田が中国漆器の存星盆や膳を参考に制作した漆器を当時県知事であった籠手田定女が称賛し、島根県の特産とするべく、島根にゆかりのある和歌である「八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を」から「八雲」として「八雲塗」としたといわれています。

存星の特徴は、彫り込んだ文様部分に色がついた漆を埋めること、文様の輪郭線を彫り込み、金を埋め込むこと、文様以外の漆の面に星と呼ばれる点を細かく彫り込んでいく点（ない存星もあります）です。

存星と八雲塗の大きな違いは、漆で描いた文様の上に透漆を塗布した点です。

坂田制作



花鳥図脚盆 明治時代

の八雲塗を見ると、中国漆器風の文様や金で輪郭線を表す点を参考にしていたことがわかります。文様は色漆で描いているものの、輪郭線は金属粉であらわしています。

また、文様は、中国漆器風に描いており、中央の文様の周囲に銀色の枠を描き、さらに枠の外にも唐草文様を描いています。このような描き方は中国漆器に多く見られます。

中国漆器を参考にしつつ、独自の技法を編み出し、八雲塗は出発しましたが、坂田の協力者であり、八雲塗の大事な絵の下絵を坂田に提供していた絵師・室田湖山に代わり、小村成章が草花文様を中心に描くようになると、当初見られた中国漆器の雰囲気は薄れていきます。

坂田以外にも八雲塗を製作する人々があらわれ、各々全国の品評会にも出展するようになった明治40年頃、レーキ顔料という新しい顔料が発明されました。

レーキ顔料が開発される以前の漆の色は、五色（青・赤・黄・黒・潤）のみしか作れず、また漆の性質により、固まった際に色が暗くなっていました。レーキ顔料を用いることにより、様々な種類の

明るい色を出すことができようになり、この色の多様さが八雲塗の表現を幅広くさせました。

その頃、当時の新聞などで八雲塗は「八雲塗は暗すぎる。もっと明るい色で作った方がよい」と評価されていました。より明るい色の八雲塗を作ることは、当時の大きな課題でした。明るい色の漆で草花の文様を写実的に描くようになっていきます。

明治20年頃に誕生し、40年頃に大きな変革期を迎えた八雲塗は、大正時代に最盛期を迎え、昭和時代には土産物として花瓶やブローチ、煙草入れなど多種多様な八雲塗を作るようになります。

昭和57年、八雲塗は島根県ふるさと伝統工芸品に指定され、現在は明治期に比べると製造業者と職人の数は少なくなつたものの、八雲塗は松江の代表的な特産品として現代もその伝統を受け継ぎながら、現代の生活スタイルに合わせて、万年筆やノートパソコンを八雲塗で装飾したり、文様を描かず箔を貼った上に透漆を薄く塗り重ねたタンブラーを製作したりなど、今までにない商品の製作に取り組んでいます。



八雲塗花鳥図重箱 明治時代後期



おおたわ やよい
千葉県出身 国際基督教大学教養学部人文科学科卒業 鶴見大学大学院文学研究科文化財学科博士後期課程単位取得退学

特集「かける」

人と食との「架け橋」

～ Sunday Market CiBO ～

(出雲市) 吾郷 百香

大学1年生の夏、私はアメリカに短期留学をしました。その際、現地のファーマーズマーケットを訪れ、活気溢れる市場に一瞬で魅了されました。見たことのない野菜や色とりどりのお花、食欲をそそる食べ物の匂い、道端で演奏している人たち。何もかもが新鮮で、忘れられない思い出です。

そこで今回、文化情報誌を制作するにあたり、出雲市内でファーマーズマーケットを主宰されている「Sunday Market CiBO」の皆さんと、CiBOの運営にも携わり、無農薬野菜の生産販売を手がける「GOOD LIFE FARM」の青野司さん取材させていただきました。

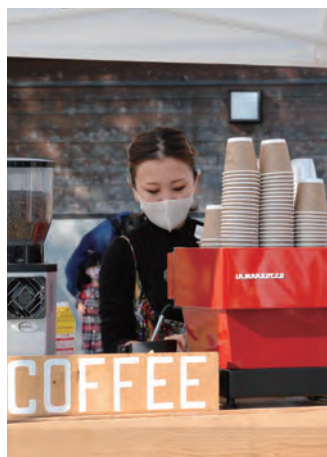
「Sunday Market CiBO」のはじまり

2017年に立ち上げ、今年の7月で3周年を迎えた「Sunday Market CiBO」は、毎月第4日曜日に出雲市内にて開催されているファーマーズマーケットです。

代表の板倉布左子さんをはじめCiBOのメンバー5名は皆、海外生活を経験されており、人々の生活の一部となっているファーマーズマーケットを肌で体験されたそうです。海外のファーマーズマーケットは、スーパーと同じく食材を調達する場所ですが、この2つには決定的な違いがあります。それは、生産者さんから直接購入できることです。会話をしながらその時期の旬の食材を知ることができたり、調理方法を教えてもらえたりします。そのうえ、コーヒーを飲みながら自分のペースで買い物ができます。毎日の忙しさからちよつと解放されとても居心地の良い空間で、そういった場所を出雲にも作りたいという思いが、CiBOの立ち上げに繋がりました。青野さんによると、そこには、「マーケットで直接生産者さんから商品を購入することで、食への興味や知識が増し、普段の食事をより楽しんでいただけるのではないか」、「生産者さんから直接買うことで、ものを大切にすることも生まれ、そしてその気持ち自然と環境にも配慮することができるようになるのではないか」という思いも強くあったそうです。

マーケット当日

10月25日。清々しい秋晴れのもと、出雲市役所のだんだん広場で Sunday Market CIBO が開催されました。私は、それまでDMでやりとりをしていた CIBO の皆さんと、この日初めてお会いします。すごく緊張しながら挨拶をしましたが、笑顔で迎えてくださったのでとても安心しました。マーケット開始前に出店者全員で行われる朝礼にも参加させていただき、その日のおすすめや意気込みを語る出店者さんたちのあいさつを聞きながら、いよいよ始まるマーケットに胸が躍ります。



午前9時、マーケットの始まりです。

開始前からお客さんの長蛇の列ができていましたが、開始と同時に勢いよくお目当ての店舗へ走り出すお客さんの光景に驚きました。「お客さんたちも本気だな」とCIBOの人氣が再確認できます。

初めてのCIBO体験でしたが、どの商品にも出店者さんの想いやこだわりが感じられて、思わず買いたくなるものばかりです。生産者さんとお客さんとの距離が近く、笑顔で会話しながら買い物を楽しむ姿が、とても温かくていいと感じました。



GOOD LIFE FARM にできたお客さんの行列

午前10時半、広場の中央で出雲市のフレンチレストラン「ランコントレ」の山口夫妻による「味覚の1週間「食育レッスン」」が開かれました。「味覚は5つの要素から構成されていて、その5つの要素をきちんと理解するには味蓄と呼ばれる舌にある細胞が重要になってくる。味蓄は子どもの時に一番活発に生産されるので、子どもの時の食事が体の成長にも脳の成長にも非常に大切」というお話を聞き、メモをとりながら「なるほど」とうなってしまうました。五味の試食キットを用いて、親子で楽しそうに食育レッスンを受けておられるお客さんの姿が印象的でした。



マーケットも終盤に差し掛かった頃、2組の出店者さんからお話をお聞きすることができました。まずは、「ながせファーム」の園山久美子さん。農業歴10年以上の園山さんは、CEOに初回から出店されています。普段は農協や道の駅にも出荷されていますが、基本的には季節の野菜をメインに、自分たちが食べたいものを家で食べる分だけ作るスタイルで農業をされているそうです。CEOに出店する際、大変なこと・苦労することをお聞きしたところ、「準備などは仕事なのでもちろん大変だが、子守りの段取り、子どもを連れてきた時が大変」とのこと。3人のお子さんの面倒を見ながらお店のこともやるのは簡単なことではないと思うので、私は尊敬の念を抱きました。反対に、嬉しいことをお聞きすると、「いつもは1人で作業をしていてお客さんとの関わりがないが、CEOでは直接販売することができ、お客さんの生の声が聞けてモチベーションにも繋がる」とおっしゃっていました。



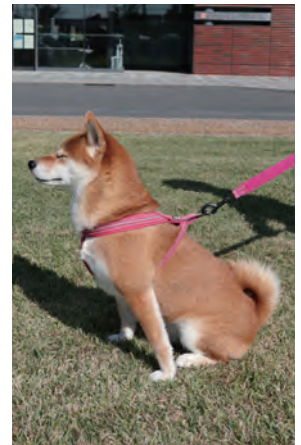
次に、お菓子を販売されている「えくぼ」の大国梨乃さん。CIBOへは2019年から出店されていて、ちょうど1年ほど経ったそうです。出店のきっかけをお聞きすると、『「えくぼ」をいろんな人に知ってもらいたいという思いと、お客さんを笑顔にできるようなお菓子を販売したいという思いがあった』とのこと。さらに、CIBOのやりがいと感想についてお聞きしたところ、「CIBOでは自分たちのお菓子をいろんなお客さんに買ってもらえるし、以前買ってくれた人が『美味しかったよ』と言ってまた買いに来てくれることが嬉しい。もっといろんなお菓子を作っていきたいという意欲が高まる」とおっしゃっていました。



市役所内から撮影したマーケットの様子



マーケット開始を心待ちに並ぶお客さんたち



園山さんと大国さんのお話を聞いて、CIBOは私たち消費者にとっても新たな知識や情報、出会いやコミュニケーションが増える場所ですが、生産者さんにとっても、同じように大切に特別な場所であることがわかります。ただ食材を買うだけの場所ではなく、生産者さんもお客さんもコミュニケーションを取りながら楽しくお買い物ができたり、ゆっくり過ごせたりする場所。CIBOって凄いなと改めて思いました。

マーケットを終えて、「もつと早くからCIBOを知っておきたかった...!」と心から思います。どれも魅力的な商品ばかりで、写真撮影という重要な仕事を忘れて買いたい物を楽しんでしまいそうになりました。マーケットの空間も、ゆったりしていて日々の忙しさを忘れることができ、本当に居心地の良いマーケットでした。ぜひ、また行きたいと思います!





畑でランチ取材

10月28日。車のナビで何度も確認しながら慣れない斐川の町を運転し、向かった先は青野さんが運営する「GOOD LIFE FARM」。この日、私は青野さんとCIBO関係者の皆さんに取材をさせていただきました。

車を降りて少し歩いたところで目に飛び込んできたのは、驚くほど広大な畑でした。私が想像していたよりもずっと広くて、しばらく辺りを見渡していました。そこでなんと、CIBOの出店者さんの食材を使っで作られたランチです。なんて贅沢なんでしょう。すべてが新鮮な食材で美味しく、中には初めて食べる食材もあります。自然に囲まれた畑でランチという貴重な経験をさせていただけ、最高に楽しかったです。ランチを頂きながら、しばらく皆さんのお話を聞いていました。終始和やかな雰囲気、とても素敵な時間でした。先日のCIBOの感想や改善点なども話し合われていて、CIBOに対する真剣な思いが伝わってきます。その後、CIBOについての取材と青野さんへの取材をさせていただきました。



まず、CIBOについてお話を伺いました。3年前に、「ファーマーズマーケットっていいよね。」という思いをもった5人のメンバーが集まり、出雲でファーマーズマーケットをやってみよう！とスタートしたのが「Sunday Market CIBO」です。「cibo」とは、イタリア語で「食物」を意味し、英語の「food」と同じようなニュアンスの言葉です。代表の板倉さんは長年イタリアにいらっしやったこともあり、イタリア風のファーマーズマーケットをやってみよう、この名前を付けたそうです。

CIBOの皆さんは、お客さんとの繋がりがコミュニケーションを一番大切にしているそうです。普段、ふつうのスーパーなどでは生産者さんも消費者もお互いの顔を見ることはできませんが、マーケットならお互いの顔を見て会話をすることができ、お客さん同士でもそこからコミュニケーションが生まれます。このようなコミュニケーションこそがマーケットの最大の魅力であると教えていただきました。

マーケットには常連さんやリピーターの方も多く、商品の感想やどうやって食べたのかを教えてくださいます。そこから新しい情報や美味しい調理方法などを知ることができるおっしやいます。とても素敵な関係性ですね。



ケットを開催するべきかどうか意見が分かれたそうです。4月と5月のマーケットは中止でしたが、その間、出店者さんの商品を集めたCBOボックスを販売されてきました。そして6月、十分な感染対策をしたうえでマーケットが再開。コロナ禍でのマーケットで気を付

けていることをお聞きすると、マスクや消毒、キープディスプレイはもちろんですが、「あれはダメ、これもダメ」とすべて禁止するのではなく、お客さんも含めみんなで意識し合って、みんなの思いやりでマーケットを作っていくのが大切だとのことでした。今はコロナウイルスの影響で設置されていませんが、マーケットのシンボルは中央に長テーブルを置くことだそうです。知らない者同士が同じ空間を共有し、新たなコミュニケーションが生まれることがマーケットの魅力の一つなのです。



また、マーケットの出店者さんをごどのように決めているのかをお聞きしたところ、「こだわりやポリシーを持って、商品を丁寧に愛情込めて作っている人をお願いしている」そうです。だから、どの商品も魅力的で心惹かれるものばかりなのかと納得しました。

CBOを始めた時と今を比べて、出店数は約10店から20店以上に増えたそうです。「みんなで続けていくうちに、お客さんとのコミュニケーションが増え、お客さんの食に対する意識も高まった。メンバーも、もっといいものを作りたいというモチベーションに繋がった」と、心境の変化もあったそうです。

最後に、今後の目標や理想像についてお聞きしました。「今のマーケットを継続していきたい。もっとコミュニケーションを取っていき、より豊かなものにしていきたい」と笑顔で話してくださいます。出店数も今より増やし、30店を目



次に、青野さんご自身のお話と普段のお仕事についてお伺いしました。

高校生のときからスノーボードが好きだったという青野さん。一年の半分は日本で働いて、残りの半分はカナダやアメリカでスノーボードをするという生活を送っていたそうです。アメリカで過ごしているうちに、「アメリカっていいなあ」と思った青野さん。「日常の中で小さな幸せをたくさん感じることができた」と、何気ない普段の暮らしの中に幸せを感じたとのこと。それでアメリカで5年半過ごされました。

アメリカのレストランで働いているとき、お客さんがご飯を食べて幸せになって帰っていくのが嬉しかったという青野さん。人を幸せにできる素敵な仕事だと思え、そのことが「食」にハマるきっかけの一つだったといいます。



青野司さん



青野さんの畑では、リーフレタスやカブ、大根、春菊、カリフラワーなど、10種類以上の野菜を栽培されています。青野さんのインスタグラムにもありますが、「美味しい野菜を作る1番のポイントは、自分の好きな野菜を作ること」だそうです。「自分の好きな野菜は自然と触る回数も気にする回数も断然に多い。美味しく食べたから、美味しい種を探し、美味しくなるための土になるように努力をする」。青野さんは本当に野菜が好きで、「食」に対してまっすぐで、愛情深い方でした。

青野さんに農業に携わる想いをお聞きすると、「農家は野菜をゼロから作れるから。ゼロから作った食べ物を食べた人が幸せになったら、それはとても素敵なことだと思おう」とおっしゃっていました。農業をしていて楽しいことは、野菜の種をまいて、成長していく過程を見ること。そして、CBOで出会った人の笑顔や美味しいと言ってくれることがやりがいだとおっしゃっていました。ただ、自然には勝てないということで、天候に左右されるのが農業の大変なところだそうです。私の祖父母も農家なので、「おじいさんも同じことを言ってたなあ」と共感したり、農業を身近に感じたりしながらお話を聞きすることができました。





取材を終えて

今回、「Sunday Market CIBO」の皆さんと、「GOOD LIFE FARM」を運営する青野さんに取材をさせていただき、自身の「食」に対する意識に変化も。以前は、買い物をする時にその食材の背景を考えることはほとんどありませんでしたが、「食」に対する皆さんのこだわりや強い愛を目の当たりにして、その背景を想像するようにになりました。そして、CIBOは普段表に出る機会の少ない生産者さんと、生産者さんのことを知りたいと思ってお客さんとの「架け橋」となるような場所だと思いました。人とのコミュニケーションを通して幸せを感じ、「明日からも頑張ろう」と思えるような、そんなポジティブな気持ちになれるマーケットです。

取材をさせていただき、青野さんもCIBOの皆さんも、自分の好きなこととことん向き合う姿勢が印象的でした。楽しいことばかりではなくても、充実感で満たされているような素敵な大人。私もそんな大人になりたいです。

最後に、ぜひ皆さんも「Sunday Market CIBO」へ足を運んでみてください。そこにはきっと、新しい発見があり、ワクワクがあり、そして安らぎがある。なにより、日々の暮らしをちよつと豊かにしてくれるものや人と出会うことができるはずです。この記事が「Sunday Market CIBO」と読者の皆さんとを繋ぐ「架け橋」になれば幸いです。(あいつ ももか)

雲南に「かける」橋

(雲南市)

田部 明

「ひだまりのおと」第二号の特集テーマは「かける」です。筆者は、地元の雲南市にUIターンをされ、地域と地域を「かける」架け橋となって活動をされている二人の方にお話を伺いました。このお二人には市役所でのインターンシップ時もお世話になり、取材日が楽しみでした。11月9日に山下実里さん、12月7日に金築利那さんにお話を伺いました。

三日市ラボにて



山下実里さん

11月9日、雲南市の木次町にあるコワーキングスペース／シェアオフィス「三日市ラボ」にて山下実里さんの取材を開始しました。男子三人の取材班で車を走らせ、木次町の町中にある三日市ラボに到着。この日は近くで選挙も行われており、大変賑やかな取材となりました。山下実里さんは京都の大学に通い、就職を機に島根県雲南市へIターンされています。特に大学生のキャリア形成に興味を持たれ、そこで出会ったのが雲南市だったそうです。雲南市にはキャリア教育にカたりバや雲南コミュニティキャンパスなど中間支援組織が存在しており、雲南市に魅力ある職場環境があったため、島根県での就職を決められたそうです。はじめは地域おこし協力隊として3年間、雲南コミュニティキャンパスなどを通して若者の支援をされました。現在は「一般社団法人 community careers」を立ち上げ雲南コミュニティキャンパスを含めた若者全体のキャリア形成の支援を行う法人で活動しておられます。事業立ち上げも「幸雲南塾」という雲南市にある若者支援の制度を利用されたそうです。若者の活動を支援してくれる環境があること。それが雲南市の一つの魅力だと考えておられました。

一日の様子

山下さんはどのような一日を過ごしておられるのか。ある一日のスケジュールをお伺いしました。午前中は久野地区で地域活動の打ち合わせです。地域で活動しておられる組織の方々と今後の活動についてのアイデア出しなどの打ち合わせをされます。その後、昼頃には雲南市役所の担当者の方と雲南コミュニティキャンプの活動について打ち合わせをされます。そして午後は今回のような取材を受けることや、定期的に行っておられるミーティングをされます。1日を通して様々な人と関わり、アクティブに活動しておられることがわかりました。自分一人でするのではなく、様々な人と関わる



ことで他の人からの視点、考え方もわかるようになったそうです。移住してから視野が広がったことに気づいたとのこと。お仕事の日もこのように活発に過ごしておられる山下さんですが、お休みの日は何をされているのかも伺ってみました。山登りやキャンプ、水上バイクなど、やはりお休みの日もアウトドアな過ごし方をしておられました。お仕事だけでなく、休日からも山下さんの活発な様子がわかりました。

山下さんがやりがいを感じる時

ここまでお話を伺い、雲南市での活動に精を出しておられる山下さん。この活動をされていて、関わってきた大学生から雲南市での経験が糧になったと言ってもらえること、また、関わってきた地域の方が元気になってくれることをやり甲斐にしておられます。自分の意思を大切に生きる人、そうした人と人の相互作用が溢れる町、深く繋がることのできる出会いがある町を将来のビジョンとして、現在の活動に取り組んでおられます。様々なイベントとおしてやり甲斐を感じてきたそうですが、全ての取り組みがうまくいったわけではないようです。しかし、もし失敗があれば次はこうしようという伸び代ができる。こうした前向きな考えを山下さんは雲南市で培うことがで



きたと言っておられました。大学はそれまでの中学・高校よりもチャレンジの仕方によってより多くの経験ができます。しかし一歩踏み出すことに躊躇してしまいう学生は少なくありません。そこで山下さんはそうした大学生たちに自らの経験から一歩踏み出すために支援をしてもらいました。山下さんが関わっておられる取り組みの中で、雲南市にある実践型インターンシップという長期間のインターンシップの取り組みがあります。このインターンシップでは雲南市の行政や企業に、全国各地の大学生が訪れます。こうした活動を通した、自分だけではなく、様々な地域の方を雲南市とつなげる「架け橋」として山下さんの力強い活動の様



子に触れることができたと思います。

山下さんのおすすめスポット

山下さんに雲南市内のおすすめスポットをお聞きしました。先程も紹介しましたが、山下さんはアウトドア好きな方でキャンプをよくされるそうで、雲南市の久野地区にある上久野桃源郷がおすすめスポットだそうです。キャンプだけでなく、やまめの釣り堀があったり、清流の館という食事処があったりと自然の中で心落ち着けるこの場所です。キャンプだけではありません。取材の終わりに山下さんと取材班で実際に行ってみました。この日は紅葉が素晴らしく、山下さんだけでなく取材班もすっかりと楽しんでしまいました。



金築莉那さん

12月7日に雲南市役所にて金築莉那さんの取材を行いました。この日も男子三人で車を走らせ、インターンシップでお世話になった雲南市役所に到着しました。金築さんは現在、雲南市役所のうなん暮らし推進課という課で移住・定住を担当しておられます。島根県内の大学に通われ、そこで観光や田舎ツーリズムについて学ばれたそうです。そして大学3年生の時に大学を1年休学して松江市の地域情報編集社に実践型インターンシップをされます。大学とそのインターンシップで学んだことから愛知県の豊根村という場所で地域おこし協力隊として2年間活動されました。その後島根県に戻り、雲南市で公務員として活動しておられます。その経歴に筆者も取材をしながら驚いていました。大学時代に学んだ経験から、移住者の中で移住はしたけど来てガツカリしたというケースもあるということを知ったそうです。そこから移住について考えられるようになりまして。せっかく移住をしたなら来てよかったと思って欲しい。しかし、自分は島根県以外で住んだことがないということに気づいたようです。そこで、それまで自分と馴染みのなかった東海地方への移住を決められます。それが愛知県の豊根

村だったそうです。地域おこし協力隊として農業や狩猟を中心とした生活を送られ、移住を実際に自分がしてみたいという経験をされました。しかし2年目の夏に祖父が亡くなられ、島根に戻る決意をしたそうです。この移住で、田舎だからこそ地域の中で自分の存在意義が大きく感じられるということを学ばれた金築さん。さらに、金築さんの祖父は雲南市での地域活動を積極的にされていたそうで、そんな祖父の背中を見て、自らも雲南市で行政に携わり、活動していくことを決意されたようです。移住担当をしながら移住前と移住後のギャップをできるだけ減らし、移住してよかったと考えてもらえるように、これまでの自身の経験を活かしておられました。

一日の様子

金築さんにも一日のスケジュールを伺いました。午前中には移住者の方との交流や面会、そして資料作成などをされます。午後にはほっこり雲南という雲南市公式サイト取材などをされます。一日中移住案内をされる日などもあり、様々な活動をされている様子がわかりました。金築さんにも休日の過ごし方を伺いました。金築さんもアウトドア好きな方で時には山下さんともキャンプをされるそうです。また愛知県の豊根村で学んだ

狩猟を行うこともあるようです。



金築さんがやりがいを感じる時

自身の経験を業務に結びつけておられる金築さんですが、やり甲斐を感じるのには移住者の方々と馴染みの関係になることができた時だそうです。時に、移住者の方から食事に誘われることもあるそうで、業務上の関係ではなく友人関係になった時、この仕事のやり甲斐を感じるそうです。移住・定住は移住者にとっては人生のかかったビッグプロジェクトであるため、それを支援する側も柔軟な対応をしなければいけないと考えておられます。この業務の中で信頼というものがどれほど大切なものかを深く感じておられました。

地域と向き合うこと

地方創生という言葉をよく耳にするようになった今日、金築さんは自らの経験で「地域を一人の力で変えることはできない」と感じるそうです。多くの人と関わりながらその取り組みはその地域にメリットがあるのかということを深く考えておられます。長期的な視点を持って地域の声を拾うため、まずその地域をしっかりととみることに。ハード面よりもソフト面を大切にしたい地方創生をしていきたいと語っておられました。こうした広い視野を持ってもらえるのも、学生時代やこ

れまでの多くの経験からではないかと感じました。例年、全国各地で行われる移住フェアに参加されるようですが、コロナ禍の影響でそれがなくなった今年、オンラインによってスタートのハードルを下げた取り組みを行なっておられます。自らの経験を交えた柔軟な対応、広い視野から多くの移住者の方と関わっておられます。全国の様々な地域の方々と雲南市を結ぶ「架け橋」として働いておられる金築さんの力強い言葉を聞くことができました。



金築さんのおすすめスポット

金築さんにも雲南市のおすすめスポットを伺いました。金築さんの祖母が現在住んでおられる飯石地区を紹介していただきました。移動の車を雲南市役所から出していただき、金築さん自ら運転してくださいました。飯石地区は金築さんが幼少期を過ごされた場所で自然が豊かで空気の綺麗な場所でした。筆者の地元である大東町と似たものがあり、落ち着きを感じました。



おわりに

今回の取材で筆者の地元である雲南市にUターンをされたお二人にお話を伺いました。お二人とも信念を持って雲南市での活動に尽力されていると感じました。お二人の活動が、雲南市と全国各地の地域の方々を結びつける「架け橋」となっています。アクティブな活動をしてもらえる若い力があること。それも雲南市の一つの魅力ではないかと感じました。

(たなべ あき)



家で、車で、職場で。

ラジオは私たちの生活の中に当たり前存在するものです。

ただ、スマートフォンやパソコンなどの機器が発達し続ける今、ラジオは昔ほど身近なものではなくなってきています。それでもなお、廃れずに残り続けているのはどうしてでしょうか。

ラジオって、今誰が聞いているのでしょうか。

島根日日新聞
FMいずも 801

耳でつながる神のまち

(出雲市)

伊折 星那

エフエムいずも

エフエムいずもは開局16周年を迎えるFMローカルラジオ局です。「市民参加型のラジオ局」をコンセプトに日々放送を届けています。また、番組の間に防災インフォメーションをお知らせする場を設けるなど、地域防災にも注力しています。



島根日日新聞 代表取締役社長 菊地恵介さん



私は、出雲市今市町にあるエフエムいずもへ取材に行きました。綺麗な衣装の中、受付には「日日新聞」の文字が。一体どういうことなのでしょう。

きっかけはふと気づいたこと

菊池さんは島根日日新聞の代表取締役、世にいう「社長さん」です。菊池さんは、大学卒業後、東京で就職。メディア関係の会社で記者をしていました。東京で結婚したのち、地元である出雲に家族で越してきました。

日日新聞で働きながら、出雲の誰もが幸せになれる社会とは何かを考えたとき、それは政治が一人歩きしない市民参加型の社会であると菊池さんは考えました。それを実現するには何が必要か。新聞とは違う何か…。

それがラジオでした。温かみのあるラジオ局で世の中のことを一緒に考えていけたら。そう考えて27歳の時に開いたのがエフエムいずもです。エフエムいずもは、ラジオ局としては社員を抱えておらず、社員は1名だけ新聞社から出向しているそうです。それは、エフエムいずもが日日新聞社の系列として存在していることに起因しています。それで、日日新聞の中にあるんですね。名前の謎に会社の歴史が隠されていました。

人材を育成する

エフエムいずもでは、インターン学生の受け入れも行っています。12回連続で自分のコーナーを作ってみる取り組みでは、自分の企画力が問われます。12回分放送できる内容かつ、ある程度人の興味をひくものでないといけません。過去には法学部の学生が自身の知識を活かした法律用語を紹介するコーナーをするなど、工夫を凝らした企画を実行した学生もいたそうです。





左から 助っ人の高橋さん、菊地社長、筆者

他にも新聞の取材をしたり、購読の営業で家々を訪ね回ったり、実際の仕事と同じような経験をすることが出来ます。社会に出る前に番組作りの楽しさ以外に地道な営業の厳しさを味わえることは、とても貴重だと感じました。

地域を守る

地域防災に力を入れるエフエムいずもは、災害から地域を守るのに一役買っています。情報一つひとつが命に関わる災害の現場で、コミュニティFMは大きな情報入手元になります。ローカルでの放送なので、今自分が住んでいる地域の情報をピンポイントで知ることが出来ます。菊地さんいわく、災害が多い国とは



いえ、市民の防災の意識はまだまだ薄いので、これからもっと地域防災の意識を高めていきたいと仰っていました。

「ながら」聞く

ラジオの魅力は視覚情報がないこと。これだけ聞くとマイナスな言葉に聞こえますが、実はそうではありません。視覚情報がないということは、その想像力をかきたてるものになるということだそうです。目で見えない言葉で伝えることに意味があるのですね。

また、視覚情報がないことで、「ながら」聞くことができます。通勤中に運転しながら、居酒屋で飲食しながら、「心地よいことを聞き流す」を楽しめるのがラジオなんだと菊地さんは言います。

ラジオというコンテンツが廃れつつある今だからこそ、言葉で伝えていこう。このラジオ局では、ローカルな情報的確に伝わるよう、自治体単位で身近な情報を伝えることを大事にされています。



水曜パーソナリティー ふらんさん

放送中

市民として参加する

エフエムいずもで毎日昼1時に放送されている「さわやか愛ステーション」。今回は水曜パーソナリティのふらんさんにお話を伺いました。お忙しい中、帰宅前のお時間を頂いて、たくさんのお話を聞くことが出来ました。

—ふらんさんがラジオに出演したきっかけはなんでしょうか。

元々ラジオが好きで、よく聞いていました。ラジオを聞くことで一日の疲れをとるんです。そんな時、ラジオをやってみないかという話があつて。元気をもらう側から、今度は元気をあげる側になれたらと思います。参加しました。

—ふらんさんはこのラジオの番組作りにどう関わっているのでしょうか。

構成自体は大まかに決まっていますが、そこからはパーソナリティの人の色で決まります。サウンドロゴを流したり、曲を流したり、リスナーさんからのメッセージを紹介したり…。ラジオとい



うと、自由におしゃべりしているイメージがあると思いますが、実はそんなに喋る時間ってないんです。私たちのラジオでは、1時間に15分は必ずニュースや天気、交通情報、出雲市内のお悔やみ等をお知らせすると決まっています。さらに先程も言った曲を流したり、メッセージを紹介したりすると、自由に話す時間は15分ありません。限られた時間を無駄なく使ってラジオを作っています。

—気をつけていることや、大変なことはありますか。

まずは、機械の操作ですね。これは全て自分でやっていて、結構大変です。そして内容ですが、視聴者の方々が求めていることを意識しながら、発信する情報



素人にはよくわからない機械がたくさん。これを自分で操作するというから驚きです。

がひとりよがりにならないように考えて内容を決めます。曲の選曲も同じように、あまり同じジャンルのものばかりは流さないように、偏りをなくしています。また、少ないとはいえ喋る時間があるので、間はあけないようにします。ラジオって音声だけですからね。

—ふらんさんが考える、エフエムいずもラジオの魅力とは？

朝は通勤中に、昼は休憩に、夜は帰りに。ラジオはそういったちよつとした時間に地域のためになる情報を聞くことができます。土曜日に放送されている「ウィーク縁どようび」は、生放送で出雲のまちのようすや観光地、そこにいる観光客の方々を取材しているんです。こういった番組は特に地域を身近に感じます。私たちのラジオを聞いてくださっている方たちからあたたかいメッセージをいただくことがあるのですが、本当に嬉しいです。そのメッセージから新しく何かを教わることも珍しくありません。

出雲で同じ時間を過ごしている人が、その時間を共有する。この、「距離の近さ」が、私たちのラジオの魅力です。

—今後の目標などありますか？

とにかく、地元とのつながりを大切にしていきたいです。そして、私たちの作っているものが少しでもためになったと喜んでいただけるように、リスナーの

方々のニーズに伝えていけたらなと思っています。ここまで続けてこられたのは、周りの人達との協力と連携があつてこそです。これからも助け合つて頑張つていきます！

—ふらんさん、ありがとうございます！

大学にもラジオが！

エフエムいずもについて知るうちに、島根県立大学出雲キャンパスがエフエムいずもで番組を持つていることを知りました。毎週金曜日20時30分から21時00分の30分間録音放送で、番組名は「いずキャンLife」。出雲キャンパスのホームページには青字で「テレビはもう面白くない！でもラジオは面白いぞ！」の文字。大きく出ましたね。いずキャンLifeという名の通り、出雲キャンパスでの暮らしについて学生、教員、職員の人達が紹介しています。

この番組は学長代行の山下一也先生と、学内の先生に推薦された学生が30分間、色々なことについて語り合います。

番組作りは打ち合わせから始まり、山下先生とのたわいない雑談の中で、本番で使う話題が決まっています。打ち合わせという名の雑談が終われば、いざ本番へ。ひとつの部屋に大きな機械と3つのマイクが並びます。

今回参加した学生さんは、看護栄養学科3年の切田千尋さんと、1年の神田滯奈さん。なんと2人も北海道出身の学生さんです。ラジオの話題は大学生活での不満やコロナウイルス、生活の中で驚いたことなど、本当にたわいもないものばかりで、あつという間に30分が経つてしまいました。



打ち合わせをする山下先生と学生さん。
まるでただの楽しいおしゃべりのよう。



少し緊張感のある収録。雑音が入らないように、話すときはアイコンタクトで。身振り手振りはつけません。



収録部屋に向かう最中。終始楽しそうでした。

「ラジオなんて、今誰が聞いているの？」
 こんな、言ってしまうえばマイナスな言葉とも受け取れるような疑問から、今回の取材を行いました。取材で見たことや知ったことは、きっとラジオについての一部分でしかありません。それでも、それだけでも、ラジオの意味は確かに存在していました。

山下先生や菊地さんが口を揃えて仰っていた、「聞き流すこと」。これは、ラジオを聞いても内容がひっつかからず、その後頭に何も残らないことを意味しています。それって何の意味があるのさ、と思う人がほとんどでしょう。私もそう思います。でもそれでいいんです。「意味の無いこと」に意味があるのです。

ラジオを聞くことに意味を見いだせなかった私は、今ラジオを聞きながらこの文章を書いています。どうでしょう、この記事を読んでいるあなたも、ちょっとだけこっちに来てみませんか。

(いおり せいな)



左から 山下一也学長代行、神田さん、切田さん

次世代に架ける

出雲神楽 山王寺和野社中 in 松江城

(松江市・雲南市)

大谷 未帆



神楽というと、島根に住んでいる人であれば、馴染み深さを感じる人が多いのではないだろうか。しかし、私は20年住み続けているにも関わらず、まだ一度も見にいったことがありませんでした。

神楽を生で見てみたい。

そう思った時、11月に松江城で2日間に渡って行われる、「黄昏時のKAGURA in Matsue」というイベントで上演されることを知りました。

出演するのは、南加茂貴船神楽社中と、山王寺和野社中。

迷いましたが、大蛇退治という演目に惹かれて、山王寺和野社中の神楽を見たいと思いました。

そして、観光協会の方々のご協力のもと、山王寺和野社中さんに取材許可をいただきました。

11月17日、取材班は、堀尾吉晴公の銅像の前に集合し、松江城天守へと向かいました。
待ち合わせしていた城の入り口に辿り



着く前の階段で、数人の男性が。もしやと思い、声をかけてみたところ、今回取材を引き受けてくださった小田博章さんたちと、取りついでくださった観光協会の方々でした。

そのまま同行させていただき、城内に急な桐の階段を上り、上演が予定されている一階へ着くと、タイムスリップしてきたかのような感覚に陥りました。侵入してきた敵を狙う矢狭間や鉄砲狭間。城を支える立派な柱。神楽の上演にピッタリの、歴史的情緒溢れる造りとなっていました。

中央にあるスペースに集まり、社中と観光協会の方々は、城の間取りなどを確



認しながら、資料を片手に着々と打ち合わせを進めていきました。

打ち合わせが終わったところ、天守の外でお話を聞かせていただきました。
辺りが少し暗くなっていた中、外灯に



ンバーだそうです。子供神楽というのは、集落の小学5年生から中学3年生で構成される神楽で、現在は存在していませんが、戦後は子供が多かったため、夏祭りなどを発表の場として上演していたそうです。

そして、大人になると都会に就職するか地元に残るかの選択を迫られ、後者を選んだ人が神楽を継承しました。多くは長男であり、跡取りとして地元に残った方々です。

社中は、祭りや文化祭など、依頼を受けて神楽を上演することが多いのだとか。しかし、活躍の場は地元だけではありません。万博や国民文化祭。海外ではドイツやハワイなど、国境を越えて上演することで、神楽という伝統を広めたそうです。

小田さんに、神楽を続けることのやりがいと、大変なお聞きしました。

しばらく悩んだ後、やりがいについては、お客さんが感動する、または涙を流す瞬間があることだとお答えになりました。また、小学生のころから続けている。また、小学生のころから続けているため、もう神楽は習慣のようなものであるとおっしゃいました。そう語る小田さんの表情には、達観したような雰囲気がありました。

大変なことについては、まずは役を覚えること、またお囃子の中でも、笛が大

照らされたベンチに腰をかけ、小田さんはゆっくりと語ってくださいました。
山王寺和野社中のメンバーは12人。80代が2名、70代が5名、60代が3名、40代が2名と、全体的にご高齢の方が多く、そのうちのほとんどは、子供神楽の元メ

変だとのこと。一つの演目でも4つくらい曲があるそうです。また、役者についても、セリフが古典的で覚えづらいため、お客さんに伝えるのも大変だということ。セリフの強弱など、表情や声や動きで伝えること。始めたばかりのころは、褒められることがほとんどなかったそうです。

小田さんの言葉を聞くと、この令和まで神楽を継承してきた努力と苦労を想像せずにはいられません。舞台は数時間でも、それを上演するまでには、途方もない年月があったことを感じます。

私たちは取材する前に、リハーサルを撮らせてもらえないかと頼んだことがあります。しかし小田さんは、リハーサルはしないと答えられました。その時、本番まで一週間で切っていたので、もう終わっているのかと思っただけですが、ずっとしていないとおっしゃいました。なぜかという、もう何度もやっていてから必要ないとのことでした。

その言葉を聞いたとき、最初は驚いたのですが、本番でそれを納得させられることになりました。

そして迎えた上演当日。

雨の中、急いで銅像に向かうと取材に同行してくれた古田さんの姿が。無事に合流し、城へと向かいました。少し早く



着いたせいか、上演会場はまだ何もセツトされていません。待つこと数分、若い男性数人が、ゾロゾロとシートのようなものを運んできました。先日の打ち合わせで話されていたアルバイトの方々では、と思い話しかけたところ、そうでした。取材班もお手伝いをしようと思いつくと、雨の中に小田さんの姿が見えました。もうほとんど荷物は運び終わっていたため、一つだけを慎重に天守の中まで運びました。するとそこには、すでに神楽の世界が仕上がっていました。

観客席のシートには、早くもチラホ

ラと人の姿が。幼い子供からお年寄りまで、幅広い年代の方々が開演を待っています。ほどなくして、会場は満席になりました。開演前、舞台裏で社中一同は車座になりました。これが、最終打ち合わせです。別段、緊張しているような雰囲気ではありません。淡々と、今日の演目や人数について確認し終わると、全員腰を上げ

ました。

そしていよいよ、幕が上がります。この日の演目は、「国譲」と「大蛇退治」。役者が観客の前に揃うと、背後にかげられた紫の幕も相まって、城内は一気に厳粛な雰囲気になりました。顔を覆う真っ白な御面。背筋を伸ばした品のある立ち姿。

演者一同が、さつきまでとは別人だと思ってくらい、いきなり別世界の住人に変容したようでした。神々の名にふさわしい出で立ちです。手始めに、役者の一人が力強い声で、語りを始めました。

視界を妨げる柱の存在を忘れるほどの迫力のある語りに、観客側はすっかり神楽の世界に見入っていました。次に、笛の演奏が鳴り響きました。お囃子という、神楽の音楽です。

ついに、物語が始まりました。まず出てきたのは、主人公である須佐之男命。言葉は難しくても、身振り手振りや声色で感情が伝わってきました。長年鍛えられた演技力が、それを可能にしているのでしょうか。

物語が中盤に入ったところ、パッと目を引く、赤と白のコントラストが目立つ役者の衣装に、目を奪われました。



ヒロインである榊名田比売の登場です。

あまりの違和感のなさに、一瞬、男性が演じていることを忘れてしまいました。須佐之男命との恋愛模様、彼女を一層女性らしく仕立てています。

登場人物が増えていく中、みんな和服姿に、御面で判別がつかづらうと思われましたが、それぞれが個性を持って演じていました。

そして、物語は終盤に入ります。一番の見どころがやってきました。須佐之男命が大蛇を退治するシーンです。舞台を大きく使って、隅から隅まで這

いまわる大蛇の迫力に、観客一同は圧倒されました。

勇敢に立ち向かう須佐之男命。無事、大蛇を退治し、物語は終焉を迎えます。

演者の総礼とともに、会場は壮大な拍手に包まれました。

おわりに

演劇やミュージカルと違い、神楽には初見で伝わるようなセリフは少ないです。しかし、だからこそ役者の演技が力を発揮し、世界を作るのでしよう。

観客席にチラホラと見えた子供たちにも、話自体は理解できずとも、心に訴えかけるものがあつたと思います。

最近では、何でもYouTube等の動画サイトで見ることができそうですが、その日見た神楽には、生で見ることができずかわえない感動がありました。事前のインタビューで知った、社中の方々がそれまで培ってきた経験を重ねてみると、まだ子供であつた彼らが、神楽を演じている様子が想起されました。

最近では、神楽を見に来るような若者は減少しています。

しかし、こういった日本の伝統に触れることで、新鮮な感動を味わえることが分かりました。

見に行くまでは、どの社中も神楽という一つのコンテンツに括っていましたが、今回の取材で、山王寺和野社中ならではの、魅力があるのだらうと思われています。それは、新しい文化が創り上げられている今でも、色褪せないものです。

取材班としてだけでなく、一観客としても、存分に楽しませていただきました。

(おおたに みほ)



寄ってみました 伊野

(出雲市)

原 出穂



宍道湖北岸にある伊野灘。国道431号線沿いの敷地に、週2回だけ現れる市場があります。11月6日（金）、人でにぎわう「よっ得!伊野いち」に行ってきました。

よっ得!伊野いちのはじまり

まず、「よっ得!伊野いち」の運営を中心になって担っておられる常松守男さんにお話を伺いました。

「よっ得!伊野いち」は、多くの人に伊野地区を知ってもらうため、2020年7月に始めたそうです。2014年から毎年、年に2回イベントとして行っていた産地直売所「伊野いち」が今年は新型コロナウイルスの影響で開催できず、人々が集まる機会が減っていました。

そのような中、「よっ得!伊野いち」が地域の方や外の方との交流の機会や集まる場所になればと思います、新しい市場の開催を決意したそうです。

「よっ得!伊野いち」という名前は常松さんが命名され、「寄つとく?」「寄つてみる?」「寄つてみたら得した!」という意味が込められているとのこと。この場所であろうと思った理由は、国道431号線沿いにあり、多くの人が行き来するため、伊野地区を外に発信するのに良い場所だと思ったからだそうです。「伊野地区の玄関口ともいえる場所だから」と言っておられました。

この場所は地主さんに貸してもらい、屋根は手作りをし、建物は常松さんの父

親に、床はポランティアのご家族に協力してもらったそうです。看板もポランティアの皆さんで手作りをし、チラシなどは伊野地区自治会の情報発信部の方に依頼したとのこと。

開催日について、本当は毎日やりたいと言っておられました。けれども、みな仕事があるし、毎日商品が用意できない。週1回だと商品が売れ残ってしまう。売れ残りを少なくするために週に2回、金曜日と土曜日に開催しています。また、金曜日は若い人は仕事が

あるため、お客さんは年配の方が多く、土曜日は年配の方よりも若い人が多いようです。客層が全然違うところも金曜日と土曜日の両日で開催している理由です。お客さんにはリピーターが多く、地元の方は3割にも満たないほど少なく、ほとんどが通りすがりで寄ってみられた方だそうです。まさにちよつと「寄つてみる」「伊野の玄関口」です。

「よっ得!伊野いち」は、「新鮮で安い!」ところが1番の魅力だと言っておられました。ほとんどの商品が伊野地区でつくられたものだそうです。



常松守男さん

新型コロナウイルス対策については、密を防止するためなるべく窓を開放し、入り口には消毒液を置くという対応をとっておられました。また、レジにはお客さんとの間に距離をとるための机と、飛沫感染防止のため透明のビニールカーテンを設置しておられました。この市場が感染のもとにはならないように、とのことです。



「よっ得!?伊野いち」の人たち

「伊野いち」は、伊野地区の自治会内に設けられた「伊野の未来をつくる戦略会議」で、10年後の伊野地区にむけて、農業・水産業部会が振興策として提案したものです。振興策は一昨年から実践しておられるそうで、伊野米の米袋制作などもされてきました。

伊野いちの店番は全員ボランティアです。商品を出荷しておられる方は、売

り上げの10%を運営費や出荷費として供出しています。

伊野地区で地域町おこし協力隊として活動しておられる福島沙織さんにもお話を伺いました。

福島さんは2020年の3月末に移住してこられたそうです。夫の地元が出雲で、「出雲に戻って農業がしたい」ということでUターン。沙織さんも移住してこられました。最初は2人で農業をする



福島沙織さん（左）と筆者

のいいかなと思ったけれど、まずは出雲を知りたいと思い、総務省に申請を出して、4月に地域町おこし協力隊として着任されました。

初めて伊野に来た時、美しい伊野の景色に魅了されたそうです。また、「方

言が素敵で、地域の方々や雰囲気があったかいところが伊野地区の魅力だ」と言っておられました。伊野地区には田んぼがたくさんあり、一般より少し早めの4月中旬から田植えを行うところ、手入れがしっかりしているところもすごいと思っただけです。



「よっ得!?伊野いち」のボランティアには、伊野地区で農業に関わることがしたいという思いから参加しておられます。お子さんがいらっしゃるため参加は主に金曜日になるとのこと。「よっ得!?伊野いち」は、売っているものが新鮮で安く、季節の旬を感じられるところも魅力だと言っておられました。

「よっ得!?伊野いち」はコロナウイルスによる自粛ムードからのリフレッシュの場、出荷者や地域の方々とのコミュニケーションの場となっているそうです。また、「よっ得!?伊野いち」が伊野地区の玄関口となり、伊野を知ってもらいきっかけにしたいと言っておられました。



るほか、フェイスブックやインスタグラムといったSNSを利用した情報発信がなされています。

「よっ得!?伊野いち」にボランティアとして参加している多久和さんにもお話を伺いました。多久和さんは伊野地区もボランティアも好きだから参加していると言っておられました。伊野地区には日本海も穴道湖も山もあり、神社もたくさんあるところが魅力だとのこと。伊野地区のみなさんは協力的で、みなさん仕事を辞めてから第2の人生として、伊野地区のボランティアをしているそうです。毎週木曜日の夜から仕込みをし、金曜日の朝も早く起きて伊野

は、なかなか外に出ることのできないお年寄りの方にお茶出しをしたり、2年前に始まったトレイルランで参加者におもてなしをしたりしているそうです。

おやつのお店むらの小村育夫さんにもお話を伺いました。小村さんは金曜日のみ「よっ得!?伊野いち」に参加し、普段は平田で商売をなさっているとのこと。「よっ得!?伊野いち」の魅力は、アウトホームな雰囲気や商売らしくない商売で生まれるコミュニケーション。また、まごもだけやきいもなど普段スーパーではなかなか見かけない野菜が売つてあるところも魅力だと言っておられました。

「よっ得!?伊野いち」は今年の7月にオープンしたばかりで、いまは先が見えないが継続していきたいとのこと。皆さん伊野地区のためにやっているそうです。「現在はボランティアによる運営だが、今後どうしていくかは考えなければならぬ」と言っておられました。

福島さんはツイッターを使い、情報発信もしておられます。地域町おこし協力隊として飾らず、お金をかけずに簡単に伊野地区の情報発信がしたいという思いからツイッターでの情報発信を始めたそうです。ツイッターでは、伊野地

区の情報を発信したり、ふとした時に感じる伊野への思いを記録したりしておられるそうです。ツイッターで情報発信をしているおかげで、コミュニティセンターで企画したハロウィン撮影会にはツイッターで知り合った地域外の親子さんも参加していると喜んでおられました。

また、自治協会が活発な活動を行っている伊野地区では広報活動も盛んで、HPも充実しています。福島さんが連載を持たれている「伊野コミュニティセンター広報誌」もHP上で読むことができます。

ちの準備をし
ておられま
す。

多久和さ
んは伊野いち
以外にも、コ
ミュニティセ
ンターで「こ
みかフェ」に
も参加してお
られます。「こ
みかフェ」で



伊野の魅力を見つけた

「よっ得!?伊野いち」で伊野地区の産品や、地域を盛り上げようという方たちの魅力を感じることができました。また、伊野地区は多久和さんがおっしゃるとおり、宍道湖から日本海までつながる「長い」地区で、自然の美しさや古くからある神社など季節ごとに見所がたくさんあります。今回少しでも見て回りましたが、別の季節にもゆっくり巡ってみたい所にたくさん出会えました。

(はら いずほ)





高原神社例祭

みえてくる町へかけるおもい

(邑智郡邑南町)

田中貴大

2020年10月24日、私は島根県邑智郡邑南町で行われた高原神社例祭を取材させていただきました。取材させていただくとともに私も例祭に参加しました。

私が高原神社例祭を取材しようと思っただけでなく、今年の開催地が私の地元だったからです。2020年、数年ぶりに私の地元である田ノ原集落で開催されると聞き、「それは行くしかない」と取材することになりました。今まで約20年住んできた場所ですが、この例祭のことを全く知らなかったので興味を持ったことがきっかけです。

今回の取材では実際に高原神社例祭に参加してきました。また、高原神社運営委員の山中康樹さんと、高原神社宮司の木村勇さんにお話を聞くことができました。高原神社や例祭についてお伝えしたいと思います。

邑南町高原地区

邑智郡邑南町は人口約1万人の小さな町です。高齢者比率も44パーセントで高齢者の多い町です。おじいちゃんおばあちゃんが多い町で私は生まれ育ってきました。その中の高原地区は小さな地区です。年々人口も少なくなってきました。その分、町の人達とはほぼみんな顔見知りです。田舎ならではのかわりや温か

さが高原にはあります。地域を活気づけるために運動会や神楽なども毎年開催しています。そこには多くの人が集まって賑やかにイベントを楽しんでいます。高原神社例祭もそのひとつです。今回取材をしたいと連絡をしたところこころよく許可していただきました。



高原神社の外観

高原神社例祭

10月24日午後2時より高原神社例祭が行われました。宮司さんたちが出てこられ、笛と太鼓の音で例祭は始まります。例祭には私たち県立大学の取材陣を含め約20人が集まっています。地元住民ということでも実際に例祭に参加しました。

笛と太鼓の大きな音が神社の中に響き渡る中、宮司さんが祝詞を唱えます。笛と太鼓は神楽のようなテンポでした。そして宮司さんが神社の奥にある階段を上り扉を開けます。そこには神様が祭られ

ておりこういった儀式のときしか開くことはないそうです。そのまま神様にお供え物をする儀式、「けんせんの儀」が始まりました。この儀式では代表の7人が選ばれ、神前にお供え物を運びます。その7人に私も選んでいただきました。普段は見ることのできない神社の奥まで見ることができました。お供え物は様々です。お米やお餅、魚に果物もお供えしました。神前に運んだ際の中を見ることができました。中は木で作られた神様の像。さらに、その葺いっばいにひろがる大きな鏡がありました。お供え物を運び終わると10分ほど祝詞や太鼓の音が響き渡ります。参加者全員がひとりずつ参拝して

いきました。参拝が終わると先ほど奉納したお供え物を神前から降ろしていきます。その儀式にも参加させてもらいました。お供え物を落とすわけにはいかないと手は震えます。次に神様を神輿へ降ろします。「オー」と大きな声を発しながら宮司さんたちが神輿へ神様を移していきます。手で神様を神輿に祭るのは恐ろしく堪えがたいため、「オー」といつているそうです。神輿に移すと次は田ノ原集落に移動します。神輿と太鼓を軽ト



(上から) 神社内の様子／神前にお供えする様子／祝詞を唱える宮司の木村さん／神輿をトラックに乗せる様子



祭りに参加した山中陽太さん(左)と山中蓮太さん(右)



田ノ原集落での様子

例祭が終わったあと例祭に参加していた山中陽太さんに感想を聞くことができました。陽太さんは、「自分は今回、田ノ原集落で行われると聞いて初めて例祭というものを知りました。意外とたくさん人が来て、こちら辺にしては大きな行事だなと思いました。太鼓も担がせてもらいましたがとても重たくて驚きました。周りは知っている人ばかりなので楽しく参加できました」と笑顔で取材に応じてくれました。

田ノ原集落へ移動すると集落の住民で神輿を担ぎます。集落の代表者が高原神社と書かれた旗をもち、それを先頭に列になります。先頭から、旗、宮司さん、神輿、太鼓という順。最後尾では笛を吹き、200メートルほど歩きました。神輿に乗せた神輿は田ノ原集落の集会所に運ばれます。そこでもお米や、野菜、お酒などがお供えされました。その後祝詞を唱え、集落の代表者が参拝しました。高原神社へ戻り神様を神輿から元の場所へお返しします。これで高原神社例祭は終了となりました。

ラックに乗せ、移動しました。参加した人もそのあとについて田ノ原集落へ行きます。

町にかける思い

例祭終了後、宮司の木村さんと、役員の中中さんにお話を聞くことができました。そこで見えてきたのは町への思いでした。まず高原神社例祭とはどういったものなのか伺いました。山中さんによると、この例祭は毎年違う地区で行つていくことです。高原地区には合計20の集落があります。その集落が1班、2班、3班のように3つの班に分かれています。例祭は毎年どこかの班の、どこかの集落で行われているそうです。例祭のやり方や、内容についてはどこも同じようにやっています。雨天の場合は中止となり、その場合はその集落は来年に持ち越しとはならず、その次の集落での開催になるとのことでした。この例祭は基本的に毎年欠かさず行われているのです。

木村さんに、どういった経緯でこのような例祭を行うようになったのかお聞きしました。最初は、若い人たちや、子供たちにお宮へきてほしいという思いから例祭は始まりました。この例祭は

1980年からやっているそうです。神社のすぐ近くには小学校や、保育園があります。ただ、お宮へ来る人は減ってきているのが現状。子供たちも含め、人が集まる場所にしたいという思いがあるそうです。年々人口自体も減ってきています。300戸以上あった氏子戸数も200戸余りになってしまいました。さらに高齢化も進み、神社の存続も危うくなってきました。例祭の運営も神社の人だけでは難しくなっています。そこで高原地区では10年前から関係する自治会で運営委員会を設立。神社の管理、運営を3年に1回各集落が担当となりやっています。今年の担当が田ノ原集落だったのです。運営委員会では主に寄附集めをするようになりました。

こうした活動は神社の方が町の人を思って、それにこたえるかのように町の人が神社のことを思ってできた活動です。2〜3年前からは、地元の神楽団がお宮へきてボランティアで神楽を舞ってくれているそうです。そこでみんなで焼き肉もするとのこと。お互いがお互いのことを思ってきた町なのです。山中さんは、「年々若者も少なくなり、参拝者も減ってきました。農作物に対する感謝の心と、人と人との付き合い、協力、共同が薄れてきている。こういった日本のお祭りを継続していくことが大事であると



インタビューの様子（一番左、宮司の木村勇さん）



高原神社例祭役員の中中康樹さん（右）と筆者



取材陣一同



(上段左から) 高原神社の周りの風景／祭りを見に来た田ノ原集落の子供たち

(下段左から) 高原神社の参道を歩く取材陣／高原神社前の空間

考えています」といっておられました。
取材の最後には山中さんから、邑南町の玉櫻酒造の日本酒をいただきました。お忙しい中取材をさせてもらったにもかかわらず、私たちにもあたたかく接してくださいました。

あたたかな町

今回、高原神社例祭を取材して見えてきたのは、人々の思いでした。高原神社の歴史をつなぎ、お祭りがなくならないように、神社に人が集まってくるようにと、町の人たちが協力しておられました。高原地区というのはそんな思いの詰まった場所なのです。

取材した高原神社例祭だけでなく、ほかにも年間の行事はたくさんあります。地区民運動会や、夏祭り、秋祭りなどもあります。どの行事にも大人から子供までたくさんの方が足を運んでいます。2020年に限っては新型コロナウィルスの影響で残念ながら中止になってしまいました。しかし、その中でも例祭は行われました。これには町みんなの思いが伝わってきます。

私は邑南町出身で、高原で育ってきました。しかし、この例祭のことは全く知

りませんでした。私たち若い人間がこの歴史を知らずに生きていき、歴史が忘れ去られるのは避けなければなりません。高原神社例祭は邑南町のホームページや、ネット検索では出てきません。この記事を通して例祭のことを知っていただけると嬉しいです。

(たなか きだい)



組合で繋ぐ人々の輪

神門通り（出雲市）

古田ひとみ



【手を取り合ってお客様へと繋ぐ】

おもてなし協同組合

毎年全国の八百万の神々を迎える出雲大社。そのお膝元にある神門通りに皆さんは行ったことがありますか？ 年間約800万人が訪れる神門通りですが、その神門通りの人通りが少なかった時期があったことを皆さんはご存じでしょうか？ 実は神門通りは2000年代、今より人通りが少なかったのです。

私は神門通りの人通りが増え活気があふれるようになったのはなぜか知るため、神門通りへ取材に行きました。

一畑電車に乗っていきました！



神門通りでイベントを開催している団体があります。それは、神門通りおもてなし協同組合です。この

組合は、出雲大社の正門前から続く神門通りに面する商店で組織する協同組合です。現在64店舗が加盟しています。

この組合は、出雲大社で60年に1度行われる檜皮葺の改修工事と共に平成25年（西暦2013年）に結成されました。

当時の状況を知っている、神門通りおもてなし協同組合代表理事組合長の田邊達也さんによると、「出雲大社の宮司を務める千家尊福さんが神門通りを名付けてくださりました。組合結成当



おもてなし協同組合は

出雲商工会内にあります！

初、神門通り 初、神門通り また、街中を歩くと目にする松の木は、

250本あるうちの55本に昭和30年〜40年の間に潤った松脂をとるために松を削った跡があり、当時のなごりが楽しめます。



松の木が削られているのが分かります！

組合では、神門通りに面した50店舗を「人生ゲーム」のマスに見立てたイベントや、街並み形成に向けた取り組み（スロープと階段の複合、日よけのれん、電線類の地中化）などを行い、神門通りを盛り上げる活動をしています。

このように様々な取り組みを行っている組合ですが、取り組みを行う上で気を付けていることがあるそうです。それは、出雲大社のお膝元ということ考えた上で企画をしなければいけないことです。

クリスマスにはイルミネーションをしないようにすることや、普通の商店街と違い観光客向けに商いをすることに焦点を当てているため、卸売りはしないように気を付けています。

特に、クリスマスにイルミネーションをしないようにすることは、田邊さんによると「出雲駅に初めて降りた外



田邊達也さん



国人が残念そうにしているため、なんで残念そうにしているのですかと聞いた際に、神々が集まる場所なら日本らしい和のような風景だと思っていたのに残念だと言われた」という経験を元に企画を許可しなかったそうです。

また、組合を結成する上で大変だったこともあるそうです。それは、民間の団体であるため、団体に入るために経費がかかり、加盟をしていないお店がでてしまうことでした。経費を払ったか払っていないかで争いが起きる可能性を考え、門前のマップが書かれたチラシを作る際、加盟していないお店を書くかどうか困ったそうです。

しかし、事前に加盟をする際に加盟していないお店も書くことになるが大丈夫かと確認をとることで争いなくマップを制作したとのこと。

今後の方針について、田邊さんは「まずはコロナが一日でも早く収束して欲しいです。この時期にお店を再開したお店もあり、収入がゼロのまま経営しておられたこともあります。一日でも早く皆が落ち着いて生活ができる環境になって欲しいです」とおっしゃっていました。一日でも早く元の生活に戻り、様々な企画が行われる日を楽しみにしています。

おもてなし協同組合加盟店に、お店へ

おもてなし協同組合加盟店

（一部）



野津明美さん



の思いや、おもてなし協同組合についての思いを取材しました。

【東伯写真館】

東伯写真館で働いておられる野津明美さんにお店の思いをお聞きしたところ、「平成の大遷宮で結婚式などの依頼が一気に増えました。最近はインスタグラムなどで情報発信された写真を見て、その構図を撮るために写真を撮ることも多いです。私共は今も昔も変わらず全力でお客様のサポートをするだけです」とのことです。

また、おもてなし協同組合についての思いをお聞きしたところ、「色々な取り組みをして町を活気づかせていて、すごいなと思っています。今年はコロナで出来ませんが、神迎えの時に加盟店を回るスタンプリナーなども行って、それが特に印象に残っています」とのことでした。



中にはスタジオのセットもあります！

【俵屋菓舗】

出雲大社の大国主命は出雲の国の大黒天様として親しまれていることをご存じでしょうか？

明治31年に創業された、俵屋菓舗。

俵屋菓舗では大国主が縁結びの神、収穫の神、産業の神、福の神として俵に座られた姿を基にお菓子を作っています。

特に「俵まんぢう」は創業当初からお菓子で、観光客だけでなく地域の人にも昔ながらのお菓子として親しまれています。

俵屋菓舗の店長である松本三枝子さんにお伺いしたところ、「大黒天様をモチーフにしてお菓子を作っています。特に俵まんぢうは創業当初からある饅頭で、現在、創業してから122年目に突入するんですよ！

著名人の色紙も見られます！



このように昔からあるお店なのですが、平成の大遷宮から特にお客様が劇的に増えて驚きました。

そんな中、働いていて思うのですが、毎年いろんな人がいろんな思いで来てくださるのが嬉しいです。夏休みやGWなど毎年来てくださるお客様もいて、お礼参りをしてくださることも多く、お客様からいつも元気をいただいています」と熱い思いを頂きました。

おもてなし協同組合についての思いも伺ったところ、「感謝しかありません。20余年前はほとんど旅館しかなく店舗ごとに孤立していた神門通りですが、



おもてなし協同組合さんができたことで店舗同士で情報共有できるようになりました

宝船・戦国船



思いました。

【出雲ぜんざい餅】

出雲大社の鳥居のすぐ近くには、ご縁

た。外国のお客様が来た時に対応できるよう、外国人向けのセミナーなども開催してくださったんですよ」とのことです。また、余談になりますが俵屋菓舗の中には、北島国造館と俵屋菓舗にしかない宝船（戦国船）があります。一度、見に足を運んでみてはいかがでしょうか？

そして、とても明るく気さくな方である松本さんに会いに行ってみて欲しいと

松本三枝子さん（右）との取材の様子



横丁があります。

そこにあるのが、出雲ぜんざい餅。

座るところは御座もあり、和の雰囲気を楽しめます。

出雲ぜんざい餅では、大納言小豆と餅

嘉藤晴香さん（右）との取材の様子



米を使用したぜんざい餅が名物です。

店長の嘉藤晴香さんにぜんざいについての思いをお伺いしたところ、

「ぜんざいのお餅は焼餅で柔らかいのが特徴です。中に入る出雲の

農家さんと契約した大粒の小豆

なのも魅力です。また、春には桜風味

のぜんざい、夏には冷やし抹茶ぜんざい、秋にはカボチャや紫芋のぜんざい、

冬にはまこもコアぜんざいも楽しめます。どの味も食べて頂きたい気持ちがあります。まずは、オーソドックスなぜんざいを食べて頂きたいと考えております。

ちなみに、商品は上の方と従業員でアイディアを出して決めています。他にも、出雲大社の近くにお店があるため、神迎えの期間は特に沢山のお客様と接することがやりがいです」とのことです。

私も出雲ぜんざい餅のメニューの一つである縁結びセットを食べたのですが、ぜんざいのお餅は柔らかくて大豆は甘過ぎず、上品な味をしています。お皿やコップ、お絞りにはお緑横丁のロゴマークが施されており、来店した人にはおみくじと五円玉が入った袋もプレゼントされます。

嘉藤さんにおもてなし協同組合についても伺ったところ、「情報共有の場です。他店舗がどんな商品を出しているのかを知ることできるし、イベントの企画もします。特に神門縁日は駐車場を使ってお店を出すのですが、その中でも神門通りの前で大きな蒸気を持ち運ぶのが印象に残っています」とのことです。

出雲ぜんざい餅のぜんざいはおススメです。

【まがたまや雲玉】

出雲といえば、勾玉で有名です。ご

縁結びセット



神門縁日の様子

写真提供

おもてなし協同組合

和の雰囲気の中にガチャガチャがあり、色んなものが入り混じっているのが分かります



野津一弥さん

の門田が毎日インスタグラムを更新しています。そして、インスタグラムとネット通販をうまく繋ぐようにできたらいいと考えています。

他にも、私共のお店だけでなくご縁横丁全体の外観で注意していることになりましたが、派手すぎず、シックになりすぎないような外観作りを心掛けていきます。できた当初はすっきりとした外観をしていたのですが、他のお店と会議した結果、ごちゃごちゃとしていた方がいいということになり、今のような外観になっています。とのことでした。

また、おもてなし協同組合への思いもお伺いしたところ、「神門通り内の仲間ができたことが良かったです。私のお店は神門通りに比較的最近できたお



できました」と笑顔でお答えいただきました。

野津さんは取材の間、ずっと笑顔で私の質問に答えてくださり、こちらも笑顔になりました。お客様への思いを大切にしているまがたまや雲玉に立ち寄ってみてください。

店で仲間がいます。そして、そのため、心配な気持ちでもてなし協同組合に入ったことで、イベントなどを企画していく上で仲間が

— 神門通りを取材した感想 —
出雲大社が近くにあることを踏まえて、商品や外観など気にかけておられることが分かりました。

神門通りを知っていく中で、今まで気に留めてなかったもの（松を削った跡・道の広さなど）を見るようになりました。

今回取材させていただいたこの方も気さくな方で、元気をいただきました。商店街での買い物はもちろん、街の方にもまたお会いするのが楽しみになりました。

(ふるた ひとみ)

縁横丁に、ウサギの勾玉が目印のお店があることをご存じでしょうか？

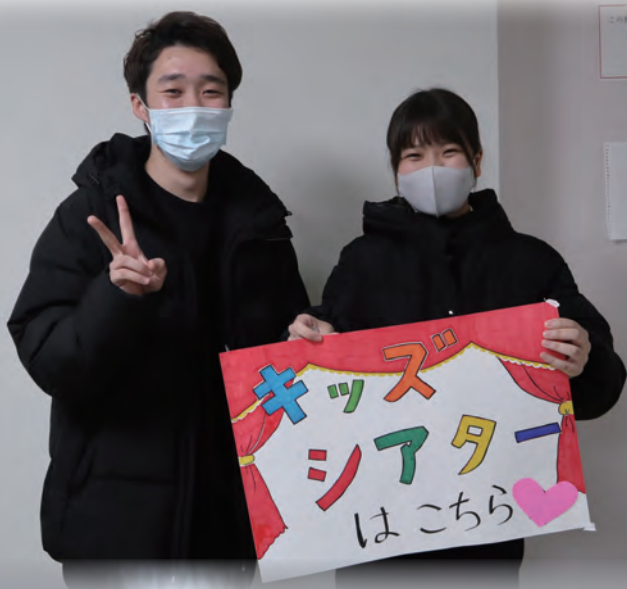
そのお店の名はまがたまや雲玉。店長の野津一弥さんに働くうえでどの思いを伺ったところ、「出雲大社が近くにあるので、色んな人に商品を勧められることが仕事のやりがいです。また、お客様はお土産として買いにくることが多いです。そのため、持ち帰ったときに傷が無いように終始お店の商品チェックを行っています。

一昔前はご年配の方が買いに来ることが多かったのですが、最近は若者の方が買うことも多くなりました。そのため、若者の目に留まりやすいように、従業員



入った正面にウサギの勾玉が見えます！





無観客開催

日時:令和2年 12月 4日(金曜日)

15:00 開演

17:00 閉演

場所:島根県立大学 松江キャンパス 2号館 2階 表現演習室

特別掲載

いつか出会える子どもたちを想って

島根県立大学短期大学部 保育学科

コロナ禍のなかでの“キッズシアター”開催

山根繁樹

2020年は、世界中で新型コロナウイルスへの対応に追われた年でした。日本でも緊急事態宣言が出され、本学の授業も遠隔を中心に行われることになりました。さまざまな計画が再考を余儀なくされ、多くのことが中止、あるいは延期されていきます。そんな中、短期大学部保育学科1年生による「キッズシアター」(「保育内容演習Ⅰ・Ⅱ」の発表会)が、「キッズ」を招かない「無観客」で開催されました。日本中の大学でも、未曾有の事態に直面しさまざまな「チャレンジ」がなされたはず。ここでは、保育学科の学生たちが挑んだ「チャレンジ」の様子をお伝えします。

キッズシアター開演

キッズシアター開催当日、会場に「キッズ」の姿はありません。代わりにいるのは、保育学科2年生たち。アドバイスしてきた2年生が、後輩の「到達点」を守ります。開演に先立ち2年生に挨拶する授業担当の渡邊寛智先生が、「子ども





2日前、練習風景を撮りながら「楽しそうだけ大丈夫かな」と感じたことを思い出し、こちらが緊張します。うまくいったのでひとりでジーンとしてしまいました。後で聞くと、グラスベルでの演奏を2日前にハンドベルに



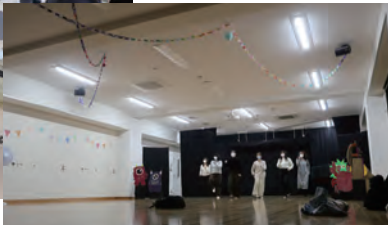
の反応でお願いします」と声をかけました。「子どもの反応」？ という疑問は、開演後、「保育の学生」！ という感嘆に変化します（このあとすぐ）。

変更したとのこと。「大丈夫かな」と思ったのは筆者だけではなかったようです。

続いて歌唱パート6人の登場。ともだちみんなでお出かけするオリジナルストーリーのなかで、ダンス付きで歌を披露します。元気な歌と踊りに、2年生が即「反応」。歌と一緒に口ずさみ、身体を動かして6人の振りを追っていきま

す。歌い進むごとに会場の一体感が増し、「まだまだ続いてほしい」という気分になりました。そして、2年生は「参観」

しているのではなく「参加」しているのだとわかりました。



次に登場するのは、クイズパートの5人。誕生日パ

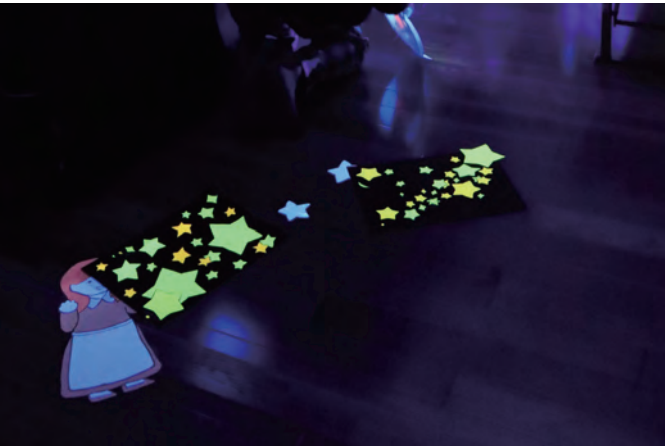
にまつわるクイズでした。こちらにもストーリーはオリジナルで、どこに片付けるか、食べ物は何か、と問いかけていきます。問いかけた先にいるのは2年生。すると、訊かれる前から答える！ 訊かれてもいないことをしゃべる！ そこにいるのはまさに「子ども」。クイズパートの5人が一瞬ひるんだように見えたほど、どんだん声をあげていきました。い

やいや、さすが「保育の学生」！ 振り返りの授業でも「先輩が反応してくれた」という感謝の言葉が聞かれました。

人形劇パートの9人は、クレヨンが主人公のオリジナルストーリーを披露します。初めは紙で作っていた人形を、フェルトに変更したそうです。苦労もあったようですが、ケースに入っていた紙のクレヨンがフェルトの人形として登場すると、「かわいい」の声があげられます。さ

まままな色のクレヨンがそれぞれ役割を果たし、敬遠されていた黒クレヨンも自分の存在意義を見つけるストーリー。練習で一度もなかったという、背景が落ちるハプニングもありまし





たが、「失敗」と感じさせない落ち着いた対応で、話に集中できました。

前半の最後は、わくわく楽しみ隊による「おどろどうぶつ森」。このパート、昨年まではなかった新しい試みで、ゼロからアイデアを出して作りあげています。「おしちやだめ！」なボタンを押した女の子が、動物たちと出会うストーリーで、一緒に身体を動かします。もちろん、会場みんなを巻き込んで。さすがにここでは「子ども」になりきれない2年生から悲鳴のような声が漏れ、身体の柔らかいパートメンバーにどよめきも起きます。昨年よりも限定された準備期間のなか、「新しいことをしたい」と意気込みつつ、内容がどんどん変わっていったというパート。キッズシアターに新たな歴史を刻みました。

休憩を挟んで後半最初は、ブラックライトパネルシアターです。3人しかいないパートですが、録音した『星ごころぼう』のストーリーと台詞にあわせて、闇の中に光る物語世界を浮かびあがらせていきます。特に星空の描写はとても見事で、会場からはため息と「きれい」の声があげられました。おとなしめの3人のようでしたが、表現しきった内容は堂々たるものでした。

続いては、オペレッタパートによる『ブレーメンの音楽隊』。歌あり、ダンスあ



りの楽しい舞台で、年寄りの雰囲気は漂わせるロバの登場から、大きな動きの二ワトリまで、動物たちそれぞれの個性が際立ちます。旅を続ける動物たちが灯りのついた家を見つけると、そこにはどうぼうたちが。しかしこのパート、人数は6人。役を掛け持ちして物語を紡ぎました。振り返りの授業で出た「子どもたちがいないからこそ、子どもたちが見たら、と考えることができた」という感想が印象的でした。

再び登場のクイズパートが、前述したケーキに載せる食べ物クイズで盛りあげた後、最後に登場するのが劇パートで



す。題材はご存じ『シンデレラ』。母親キャラがいきなり会場の空気を沸き立たせませす。可憐な雰囲気シンデレラ、堂々として美声の王子様、腰の曲がった城の執事と、次々に个性的で役びつたりのキャラクターが登場。よく知られたストーリーを、自分たちの作りだしたキャラクターで演じきり、大きな拍手のなかで終幕を迎えました。

キッズシアターを終えて

終演後、1年生の「三役」（実行委員長・総合責任者の3名）を務めた、糸賀正貴さん、上村菜々子さん、松田夏海さん



んが並んで挨拶。2年生に対しては時間を作って指導してもらったことへの感謝、先生方に対しては無観客でも開催してもらったことへの感謝が述べられました。2年生のなかから昨年のパートナーと三役が感想をくれます。そのうち、川内彩愛さんからは「どれだけ大変だったか、自分たちにはわかる。昨年までのDNAが明らかに進化していた」。中谷美優さんから「人前で発表することが何よりも大事。自分たちも、子どもたちにどう見えているのか感ずることができて勉強になった

た」、との言葉がかけられました。最後に渡邊先生から「しゃべる前にマスク、まず手指消毒！」と声がかけれ、みんなで会場の片付けを行いました。

翌週、保育内容演習Ⅱ最後の授業で「振り返り」が行われました。全員がそれぞれの思いを語った後、三役が語ります。糸賀さん「三役になって1ヶ月でキッズシアターを迎えるのは不安だった。『コロナだから中途半端でもしかたない』にはしたくなかった」



感想を話す川内さん（2年生）

上村さん「仕事は例年よりも少なかったかもしれないが、心理的には大変だった。



「三役」左から 上村さん 松田さん 糸賀さん



左から 梶谷先生 小林先生 渡邊先生

渡邊先生「4月には、今年のキッズシアターは無理かもと考えていた。秋学期が始まり、先生方からは『開催が早いのでは?』という声も出ていた。それでも、短い準備期間のなかで開催できた。2年生の言葉にあったように、人前で発表することが大事で、舞台は人を成長させてくれる。表現、コミュニケーションでは、共感や相手の思いを受けとめることが重要。そして、大切なことは『これが始まり』と思うこ



「振り返り」の授業

一番嬉しかったのは、感染なしで開催できたこと」
 松田さん「劇パートのリーダーも務め、実は不安もあった。三役に選ばれた当日は、心が折れた。それでもできてよかった。みんな大好きです!」
 最後に、担当教員からも、授業を締めくくる言葉が語られました。
 梶谷朱美先生「リハーサルからも随分変化していて、底力を感じた。みんな自分と対話したと思う。子ども目線を持つことで保育者としての質を高められた」
 小林美沙子先生「大変だったはずなのに、『楽しかった』という感想が多くて嬉しかった。2年生のようになりたてたという言葉も聞いてよかった。これからも、子どもだつたら? 子どもにとっては? と考えることを大切に」
 渡邊先生「4月には、今年のキッズシアターは無理かもと考えていた。秋学期が始まり、先生方からは『開催が早いのでは?』という声も出ていた。それでも、短い準備期間のなかで開催できた。2年生の言葉にあったように、人前で発表することが大事で、舞台は人を成長させてくれる。表現、コミュニケーションでは、共感や相手の思いを受けとめることが重要。そして、大切なことは『これが始まり』と思うこ

と。今回の経験は保育者になるための始まり。いつか必ず子どもたちの前でやってみてほしい」

無観客で行われたキッズシアターは、授業の一環としては大きな成果をあげたのではないのでしょうか。互いがあることで、関わることで、自分のことがわかり、自分が変わる。それこそが大学で学ぶことの意味なのかもしれません。伝える相手である子どもたちがいないこと、大学に集まるのも難しい状況であることで、改めてそれに気づけたように思います。

いつか出会えるはずの子どもたちを想いながら作りあげたキッズシアターで、学生たちは、同じ想いを持つ仲間たちに出会うことができたのでした。
 (やまねしげき 総合文化学科教員)



編集後記

この本を制作するにあたって、取材に応じたいただいたお二人をはじめ、取材を手伝ってくれた男子二人や編集でかなりお世話になった先生方など多くの方に感謝したいと思います。ありがとうございます。

ありがとうございました。新しい地元の魅力を知り、またそれを伝えることができる良い機会となったと思います。多くの方に手に取っていただけたら幸いです。(明)

文化情報誌制作の授業を通して、たくさんの方との出会いや新たな発見がありました。そして、取材で感じた魅力を最大限に伝えるためにはどうしたらいいのか、ひたすら悩み、考えました。制作中、もつと語彙力とセンスが欲しいと何度も思いました。ですが、無事に完成し、満足のいくものに仕上がりました。ご協力していただいた皆様、本当にありがとうございます。(百)

神門通りに面するお店からいくつかピックアップして取材させていただきました。アポを取るとき、取材したい理由をいかに理解していただけるように伝えるかが大変でした。アポ取りをさせてい

ただいたお店の方からは、取材の仕方についてより良くするためのアドバイスもいただき、私の中で糧になりました。また、取材では貴重なお話ありがとうございました。どんな質問でも快く答えて下さった皆さんに、改めて感謝の意を表します。(古)

取材したり記事を書いたり、なんだか記者になったような気分です。とても楽しかったです。完成が遅れてしまったのが一番の反省点ですが、たっぷりと時間を取って取材に答えてくださった小田さん、協力して写真を取ったりアドバイスしてくれた取材班のおかげで、いい記事になりました。急な依頼に応じてくださった社中と観光協会の方々、サポートしてくれた取材班の一人ひとりに感謝を述べたいです。ありがとうございます。1人でも多く、この本を手にとっていただけることを願っています。(帆)

今回の授業で、自分の地元を取材しました。地元でも知らないことばかりでした。改めて地元の魅力が見えてきた気がします。取材をするということが初めての経験だったので正直大変でした。でも、協力してくれた友達や、取材をさせていただいた方々のおかげでいい記事ができたかなと思います。本当にありがとうございます。

ございました。今回のこの記事で私の地元のことをいろんな人に知っていただけたとありがたいです。(貴)

私の記事は山根先生の多大な手助けにより完成したことをまずはお伝えします。先生の不安をよそに締切ギリギリを攻め、徹夜した日もありました。それでも、よく雑誌編集の人や漫画家の人や「締切に追われる」という経験が出来ただけで私にとっては大いに意味があったと思っております。

この授業を取らなければ出会えなかった人や知識に触れて、自分の視界を少しだけ広げることができたように感じました。記事を書くにあたって協力して下さった全ての皆様に感謝します。

今回の経験を活かして、これからはもっとギリギリを攻めていきます。(星)

記事をつくるのはとても難しく山根先生と小倉先生には大変お世話になりました。先生方のおかげで完成することが

できました。ありがとうございます。今回取材したところは以前から気になっていたところだったので知ることができて良かったです。

お忙しい中取材をさせてくださり、ありがとうございました。(原)

巻頭には、今年度授業でご講演をお願いした大多和さんから寄稿いただきました。お忙しいなか厚かましいお願いにお応えいただき、誠にありがとうございます。本誌は学外での取材を基本としていますが、無観客キッズシアターを「特別掲載」としました。「今年限定」の出来事となることを願います。(繁)

ひだまりのおと 第2号

2021年3月20日発行

編集 『ひだまりのおと』編集部

責任者 山根繁樹

E-mail: s-yamane@u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部

総合文化学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社

制作指導 小倉佳代子 山根繁樹



出雲市 だんだん広場